

クローズ
アップ

『詳説世界史』 の執筆にあたって

木村 靖二

新 たな世界史教科書では、新科目「歴史総合」の導入や、執筆者の交替もあって、これまでの教科書のかなり大きな編成替えが必要になった。今回の学習指導要領では、世界を諸地域の歴史ととらえ、古代からの発展過程をそれぞれの地域の都市国家から広域国家形成への進化過程と相互の交流、さらに多神教混在時代から一神教優位世界への転換などと重ね合わせて考えさせることが求められている。こうしたことはこれまでも指摘され、部分的に取り入れたことがあったが、全体的にそれにもとづいて編成するというのはやはり大きな改訂であろう。

具体的には「中央ユーラシア」の地域設定やイスラーム世界の詳しい内容の記述、また南北アメリカ地域の立ち入った説明などにおいて諸地域設定の特徴がよく現れているように思われる。もっとも以前の教科書でもそうであったが、世界史のなかで日本の位置や特質を考えさせるという点では、第Ⅰ部・第Ⅱ部での日本の記述の少なさは今後の課題である。

世界史探究の『詳説世界史』（世探704）では、今回から教科書の判型を大きくしたこと、カラー図像・図版が多くなり、解像度も向上したことで、みやすくなったのではないかと思う。現場での説明もしやすくなったはずで、またその選択や訳にかなり苦勞させられた史料もかなり多く掲載することができた。ぜひ有効に活用してほしいと願っている。もっとも、選択などに関しては、執筆者側の思い込みも当然あるので、現場での使い勝手を含め、図版や史料についての助言や提案をいただければありがたい。

私の関係する18世紀末から現代までの近現代部分では、新しい執筆者を得て、内容にもかなり変更があった。さらに章別編成などでの配置変更があったし、記述の削除や説明の簡略化をよぎなくされることも増えた。

配置替えの例では、たとえば第12章で、これまでのアメリカ・フランス・中南米の革命が別れて配置されていたのが、環大西洋革命として理解できるよう連続して配置されるようになった。さらに、中南米に関していえば、記述も古代からより詳しく記述されるようになった。これは、これまで中南米地域の記述が比較的簡略に扱われてきたからでもある。しかし、だからといって、教科書のページ数を増やせ

ばよいとはいえない。そのためどうしてもこれまでの教科書を精査して、やや詳細に説明されてきた事項から主旨には影響をおよぼさない範囲で簡略化できる部分を削除せざるをえなくなった。その一例としてあげられたのが、かなり詳細であるとの指摘が以前からあったフランス革命の記述である。そこで今回は「球技場(テニスコート)の誓い」が削除対象の1つになった。個人的に言えば、かつて教科書ではじめてこの用語をみたとき、当時のヴェルサイユ宮殿にテニスコートがあったのかという驚きと同時に疑問がわいたことを忘れられない用語であるのだが。

ほかにも、「ヴェルサイユ行進」や「ラ＝マルセイエーズ」などが、精査した結果として削られることになった。説明や項目がいきなりなくなるのは困るという声が出るのはもっともなことだが、新しい学習指導要領において、諸地域間相互の連関を重視しながら、それぞれの革命の目的の相違とその理由を考えさせるのであればやむをえないのだろう。こうした例はほかにもあるだろうが、是非ご理解いただきたい。

ところで近代・現代を扱ってきて、直接『詳説世界史』の内容に関わることはないが、以前から気になっていることがある。冒頭の「世界史を学ぶみなさんへ」でも触れたことだが、20世紀後半から急増している独立国家の数についてである。世界史の教科書では諸地域を規準として、それぞれの成立・交流(衝突も交流の1つである)を対象とするが、近現代では有力な国家、あるいは国家の連合体を対象にして、その歴史(政治・経済の動向や社会状況)を扱うことが多いはずである。しかしそうした扱いは1950年代までのように有力国家の数が限定されていればなんとかなるが、現在では国家自体の数が200近くになり、有力国家も絶えず変動し、しかも変動の終わりも不透明になっている。しかし、こうした混沌とした時代こそ、歴史を振り返り、そのなかで生きた人々や未来への突破口を見出そうとした思想家や指導者の努力から学ぶことが重要ではないだろうか。

「すべての歴史は現代史である」といわれるが、それは人が歴史に関心を抱くのは、結局現在を知りたい、現在はどのような時代なのかを理解したいからである。だとすれば、混沌とした現代の位置や問題を探るのうえで、新しい『詳説世界史』はその手助けになるはずと期待している。

(きむら・せいじ／東京大学名誉教授)